

## 「岸边に立つイエス」(ヨハネ 21:1-9)

齋藤 五十三 師 (TCU 専任教員)

### 1. なぜ漁に (2-3 節)

「私は漁に行く。」復活の主に出会った後、湖での漁に出ていく。この弟子たちの行動をめぐっては、注解者の間で様々な見方がある。厳しい見方は、「主の弟子であることをやめたのか」というもの。心優しい見方は、「実際の生活もあるのだから」と、理解を示すもの。漁に出た弟子たちの姿を評価することは難しいが、前の章で復活の主に出会っている弟子たちの姿としてはどこか物足りなさを感じる。エマオ途上のこと、そしてトマスの出来事等を通して、たとえ目に見えなくとも復活の主が共におられることを、弟子たちは経験していたのである。漁の結果が空しく終わったことは、そんな弟子たちの中途半端な姿を象徴的に示しているとも言える。

### 2. 岸边に立つ

漁の結果が空しく終わったその夜明けに、主は弟子たちに現れていく。主がこのようにして、弟子たちを励まし、導くために現れたこと自体がメッセージとなっている。しかし、弟子たちは、それが主であることに気付かない。そんな弟子たちに主は言葉をかけていく。「舟の右側に網を打ちなさい。」弟子たちはそれに従っていくのだが、なぜ、見ず知らずの声に従ったのだろうか?聖書注解者たちも、弟子たちがなぜ従ったのか、頭を悩ましている。この「なぜ」を説明するのは難しい。

しかし、こうした弟子たちの姿は、御言葉に聴く生活の実際を物語っているように思う。復活の主は、私たちが聖書に向かう日常生活の中にも共におられる。しかし、そうした主の臨在に気付かぬまま聖書を読むことが多いのが実際だろう。聖書の言葉に耳を傾けながら、「みことば」を通して主が語っていることに注意を払わず、時には、重い足を持ち上げながら従うこともあるだろう。それでも、そのように神の言葉に従う時に、それまで気づかなかった復活の主の臨在に目が開かれることがある。ヨハネが「主だ!」と気づいたように。

### 3. 共にいる日常から再び

復活の主の臨在に気付いた時、弟子たちの応答は様々であった。ヨハネは、ヨハネらしく。そしてペテロはペテロらしく。いずれにせよ、それぞれの応答を主イエスは、岸边で迎えてくださる。そこに、復活の主と共に生きる新しい日常が始まっていく。

### 結び

私たちは信仰の生涯において、復活の主が共におられることを何度も確かめていくもの。復活の主はいつも親しく声をかけておられる。この親しい声に気付いていきたいと願う。